

## 書評

ヨースト・ヘルマント著 識名章喜訳『理想郷としての第三帝国』（柏書房 2002年）

小野清美

1

本書は、様々な社会ユートピアや大衆小説・通俗小説の世界を描き、大衆化現象と不可分のナチズムの台頭期・ナチ政権期の特徴的な社会心理ないし願望の一端——というのは、娯楽小説の世界とそれを楽しんだ読者層の社会心理を単純に同一視することはできないだろうから——を浮かび上がらせたユニークな著作である。しかも、各種の社会ユートピアへの批判的論評を通じて、(大衆)文学の領域をはるかにこえて、ナチズムとナチ運動の展開に関する、歴史学や政治学の立場からみても有益な見識や洞察がちりばめられている。ナチズムは周知のとおりオリジナリティのある首尾一貫したイデオロギー体系・理論体系をもたず、内部も様々な潮流・傾向の寄せ集めであり、焦点の当て方や観点しだいで、反近代的・農業ロマン主義的、あるいは逆に近代的な色彩が強調されるなど様々に解釈されてきた。著者は、一方における左翼的および「特有の道」論的立場と、他方における「突発事故」の立場とをともに斥け、両方の流れから有効と思われる見方を取り入れ、ナチズム・ナチ運動をその複雑な構成を前提にして、時期に応じてそれが再編されダイナミックな変貌を遂げていくものとして描いている。

2

まず、序論において国家論に関する骨太い問題提起がなされている。それは、本書刊行（原書は1988年）後ヨーロッパ統合が進展しつつあるとしても、グローバル化の奔流のなかで依然として一般に重要な意義をもっている。著者はとりわけ社会民主党系やリベラルなど進歩的陣営がドイツ史の中から独特の形で提出されていた「公」(Gemeinsinn)の意識をしかるべく汲み上げた積極的な国家論を提起できなかったことを指摘する。この批判は過去にのみ向けられているのではない。修正主義歴史家や新右翼が台頭する現状にあってリベラルやリベラル左派は、抽象的な理念的國家観＝「護憲愛國主義」を掲げるのみで、「国民にとっての公」の觀念に冷淡であり、國家をめぐる価値観そのものを否定する者もいる。その結果國家は単なる經濟的枠組み程度としかみられず、「利益至上主義、消費万能主義的な經濟自由主義に基礎をおく國家」觀が蔓延している。このように著者は國家觀をめぐる現状を批判している。その問題意識は、上から操作された「公」に基づく國家觀ではもちろんなく、また、いわゆる進歩派の必要悪としての國家(權力)と市民社会ないし生活世界の対置でもなく、勤勞する多数者による下からの合意に支えられた、公共善・公共の福祉(Gemeinwohl)を目的とする積極的な國家觀を、ドイツ史

に内在的にどのように構築していくかということであり、その際に、新しい Gemeinwohl の内容として地球環境を考慮した成長の制限という現代的要素も加えられている。

こうした観点から著者は、本論において、「ドイツの公」意識の源を 16 世紀前半のドイツ人文主義者がタキトゥス『ゲルマニア』から獲得した「自由、勇敢、誠実、しつけ、寡欲」というドイツ的 = ゲルマン的な美德観念に求める。そして「下品な民衆」に距離をおく上層市民により輸入された普遍的コスモポリタンの啓蒙主義の理念ではなく、むしろこれとは対抗した一八世紀末から一九世紀初頭の「愛国者」「民主主義者」と名乗った潮流や、ドイツジャコバン派のなかに「ドイツの公」の成立をみる。ここで成立した民主主義的・自由主義的な「公」の精神、国民的傲慢とは無関係のドイツ的な公精神は、ついで、解放戦争のなかで復活し、かつ同時に変質（民主主義的愛国者のイデオロギーが国粹的方向に狭隘化）し、一九世紀末葉の全ドイツ主義やフェルキッシュ・ヴィジョン（この段階で初めてニーチェ亜流からファシズムの原型的理念が孕まれる）へ、そして第一次大戦での敗北をへてナチズムが僭称したユートピアへと捻じ曲がっていくという流れで捉えられている。

著者はしかし、この変質と歪曲の過程にもなお検討に値するドイツ的公精神の表出があったのではないかと見る。そのことは、古くからの民族派の思想と運動で掲げられた Gemeinwohl という言葉には真つ当なものが含まれていたのではないかという問い（11 頁）や、もう一つのよりよい国家を求

めようとした幅広い層のドイツ人の願いはナチスによって踏みにじられた（281 頁）といったコメントに示唆されている。だが、あるべき積極的国家観につながるものをドイツ史に内在的に読み取ろうとする著者の試みは心情表明の域を出ておらず、むしろ文学の分野から提起された政治学や歴史学の課題として受け止めねばならないであろう。

### 3

次に著者は、雑多な構成のナチズム・ナチ運動を、大きくみて 1929-33 の時期と政権掌握後イデオロギー的一元化が行われる 1935/36 までの時期という二つの段階をへて、ヒトラーを中心とする党幹部の政治運動としての観点が貫徹する形で再編され、イデオロギー的変貌を遂げていくものとして捉えている。そして、この再編・変貌過程の複雑に入り組んだ観念世界を、豊富な史料文献を材料にして描きだすのだが、そのポイントは次のとおりである。

第一に、今や政権掌握を視野に入れ始めたナチ党幹部大多数は、「血と土」思想を本気で信じていたとはとうてい思えず、世紀末のフェルキッシュ派や広範な中間層の動員、感情の高揚に好都合な、帝国主義的機運の醸成など、様々な実際の理由から状況の変化に合わせて利用した。第二に、ユートピア的要素と資本主義体制に順応していく軌道修正とが入り混じった再編過程では、ナチ・イデオロギーはかなり支離滅裂で混沌とした様相（革命志向と反動的傾向、無産者的立場と資本家的立場、宗教的あるいは無神論的、近代主義的あるいは伝統主義的姿勢の混在）を呈したが、このイ

デオロギー的矛盾・混沌は、プロパガンダ上の効果を計算しつつ放置され、矛盾したまま広範な層の情緒的動員には効果的だった。第三に、この再編過程の中核ないし頂点にいたヒトラーは、ユートピア的な要素（市民階級批判と労働者階級への常に肯定的で上昇の道を用意する volkssozialistisch な要素、自然治癒力志向や動物愛護・自然美への強い思いなど生活改善運動的な側面、モニュメンタルな建築への執着に典型的な審美的な要素）を持っていたが、リアルなものに対するセンスと悪魔的なものに対するセンスを兼ね備え、パワー・ポリティクスを志向した「現実政治家」である。彼は一面的な農民賛美や古ゲルマン社会への回帰願望などとは無縁であり、きわめて現実的に経済優先、科学技術優先の対応をする「冷徹な戦略家」であった。

台頭期のデオロギーに目立っていた反近代的な諸要素と権力掌握前後から実際に貫徹していく現実主義路線とを区別し、矛盾・混乱した様相を描きつつも、そこに貫く基調を読み取るこうした捉え方は、柔軟で説得的だと思われる。政治運動としてのナチ党、とくにその現実派＝主流派と、各種オカルトの傾向とも絡み合った世紀末来の様々な色合いのフェルキッシュ潮流 (altvölkisch) とが区別され、人脈的な一定の連続性をおさえつつも、全体としてはむしろ断絶面が重視されている点も、「公式の」ゲルマン崇拜は第三帝国時代に存在しなかったという確認とともに重要である。同時に、現実路線と平行して存在した神秘的非合理主義の諸傾向（ナチ上層の一部におけるエリートの騎士団秘密結社のデオロギーと活動の強化、キリスト教的聖杯伝

説のアーリア風再解釈など）の叙述に大きな紙幅が割かれており、ヒトラー自身も聖杯への思い入れを共有するなど、一面ではそれと無縁でなかったことが描かれている。それらは、世俗化の絶頂における政治的擬似宗教としてのナチズムの本質にかかわることであろう。大勢として下級中間層やデクラッセ出身のディレタントたちからなり、成り上がりの権力欲・支配欲を内奥の核としたナチ指導者たちは、言葉の真の意味での支配者＝統治者としての正当性（公共善に対する無私の奉仕とその能力）に欠けるからこそ、今や「支配人種」の指導者と妄信してエリート主義的心理を肥大化させ、オカルト的＝非正統的世界認識・非キリスト教的選民思想（横山茂雄）で武装したのだともいえよう。

#### 4

通常の歴史や政治史の文献と異なり本書のもっとも面白い点は、それぞれの時代にどのようなユートピアが語られたか、ナチズム的な「ユートピア」や戦間期の状況に規定されたドイツの「活路」が、大衆通俗小説レベルでどのように描かれていたかの具体的叙述を通じて、ナチ的解決を支持した大衆レベルでどんなイメージが流布していたかを垣間見られることである。それぞれの時期について言及する紙幅はないが、全体的に見ると、ナチ運動再編過程と一定の平行関係がみられること、および、この基調と矛盾して、党主流の路線とは乖離したまま、荒唐無稽のユートピア的な期待感——多くの小説でドイツの技術と技術者のヒーローが奇想天外な活路を開くのが特徴的である——が大衆小説・通俗小説の世界

で表現され続けたというズレが捉えられていることが興味深い。前者について言えば、強国として復活するドイツが描かれた1929-1933の時期に続いて35/36頃までは、ナチ党の現実主義路線と並存する形で、ナチ文学では人種血統主義、アーリア・ゲルマン崇拜のユートピアが大きな比重をしめていた。しかし、やがて小数のユートピアの革命志向派とともに、狂信的なゲルマン崇拜やロマン主義、神秘主義、母権制、反文明・反テクノロジー・反資本主義などの立場の人種狂信家ないしオカルト的潮流は否定され冷遇され排除されていき、あるいは適応を余儀なくされた（たとえば、ともに母権制論を唱えたバルクマンの別のテーマへの転向、アーネンエルベ初代所長ヴィルトの解任）。

## 5

さて、著者のナチズム把握の仕方は、この二つを抜きにナチ運動は考えられないとする、次の二点に見て取れよう。①プロパガンダに利用したアイデアの拠り所になった、他のフェルキッシュグループや「新保守主義」（＝いわゆる保守革命的潮流）の活動、②「指導者」の存在（ナチ党は究極的には、単なる幹部ではなく宗教的権威としてのヒトラーの個人政党だったとする）。つまり、①の要素のこうした位置づけにより、ナチズムの寄せ集めの思想は、結局は戦前フェルキッシュやニーチェ垂流、戦後

の新保守主義的潮流に帰せられている。人種主義的選民思想的支配欲、人種論なども世紀末フェルキッシュ思想の延長に捉えられており、こうした負の連続性を重視するという形で「特有の道」論を部分的に摂取しているのであろう。その一方で、そうした連続性に解消できないヒトラーの決定的で特異な位置を重視し、社会ダーウィニズムのいう自然法則と（道具的・俗流啓蒙主義的な——評者）「理性崇拜」への固執をヒトラーにおける基本的な要素とみなしている。だが、ナチ運動の実際の展開のなかで決定的な意味をもったこの面は、現実主義路線という一般的特徴づけに解消されるきらいがあり、また逆にそのことが思想的な淵源として安易に負の連続性に寄りかかせていると思われる。これは、当時の研究状況に規定されたものだともいえよう。本書の原書刊行以後に、たとえば、私見では保守革命研究に新たな段階を画したS・ブローイアーの著作がでる（1993年）し、「優生学的人種主義」の研究も進展する。社会ダーウィニズムの風潮を背景とした人種差別主義や「科学」への妄信はドイツだけでなく同時代に広く見られる現象であり、貫徹するヒトラー主義が同時代のコンテクストに根ざしていたことの意味を、ナチズムの広い意味での「世界観」のレベルで掘り下げることは、われわれに残された課題であろう。